

枚方市立図書館の病院サービス

松 井 一 郎

1. はじめに

枚方市は、大阪府の北東部で大阪市と京都市のほぼ中間に位置し、人口40万人・面積約65平方キロの住宅都市である。1970年代（以下、年号表記は西暦下2桁）における全国的な図書館設置運動の中で、本市にも市立図書館が73年4月に発足した。本市図書館事業の特筆すべき点は、当初から分館・分室・自動車文庫（ブックモバイル、以下BMと表記）によって多くのサービスポイントを有する図書館システムを計画的に目指したこと、そして障害者サービスや病院サービス、すなわち「図書館を利用するのに障害のある人々への資料提供」を重視¹⁾したことである。

障害者サービスについては、今や多くの公立図書館で対面朗読や録音図書の貸出・制作などが行われており定着した感もあるが、病院サービスについては未だ広範な拡がりを見せているとは言い難い。本市の取り組みも決して十分とはいえないが、公共図書館全般の状況を考えると、多少とも参考になる面があるかと思われる。また、本誌読者のほとんどが病院図書館に勤務されている点を考えると、病院と公共図書館の連携の一例としてもお読みいただけるのではないと思われる。

なお、筆者は93年4月から97年4月までBMに在籍し、現在はBMの運営に直接関わる立場ではない。また、以下の報告は枚方市立図書館としてではなく、事業発展の経過に対する

認識含めて、あくまでこの仕事に関わった個人としてのものである点を十分にご承知おきいただきたい。

2. 図書館概要

98年1月現在、9館・13分室・BM2台による35ステーションへの隔週巡回（ステーションとはBMが停車して貸出を行うところ、以下STと略記）を、職員84名・非常勤職員82名で運営する図書館システムである。BMには職員8名が専任で従事し、うち司書職採用者が7名で、6名が専用車両（26人乗りマイクロバス改造車。黄色い車体には「うさこちゃん」のイラスト付）の運転も担当する。貸出方式はBMも含め全館的に逆ブラウン式を採用しているが、97年1月に新築移転した菅原図書館のみコンピュータを利用している。

現在の最も大きな課題は「中央館がないこと」であり、それによって日常的に矛盾や無駄を多く抱えている。また中期的な課題としては、全館のコンピュータ化と整理業務集中化の推進であり、財政難を理由に大幅に減額されている図書費の復活も重要なポイントである。

3. BMと病院サービスの歴史

(1) 図書館発足から津田図書館開館まで (73～90年)

図書館発足当初の約6年間（73～78年頃）は小さな「本館」と更に小さな分室、そして市内各所に点在させたBMのSTが事業の中心をなした。74年5月の『広報ひらかた』には、

まつい いちろう：枚方市立香里ヶ丘図書館

枚方市立図書館における病院サービス関連年表

注：BM/ブックモバイル、移動図書館（自動車庫）の略 ST/ステーション、BMが停車して本の貸し出しを行う場所

年度	月 / 病院サービス関連事項	月 / BM全般にわたる事項	月 / 図書館全般にわたる事項
1973		7/ひなぎく号巡回開始（当初29ST）	4/枚方市立図書館発足。年度末には1館7分室28STに
1974	5/市広報に「（BMが）病院、児童会へも貸出」の見出し	5/ひなぎく2号巡回開始（開始時39ST）	<年度末/1館11分室39ST>
1975		7/BM事務室が市役所5階に移転	
1976		5/利用者懇談会を実施	
1977			
1978			
1979		5/BM車庫を含めて事務所を香里ヶ丘図書館に移転	5/香里ヶ丘図書館開設<年度末/2館13分室41ST>
1980	10/『枚方市立図書館整備計画』に「病院、施設等への貸出を実施」		10/『枚方市立図書館整備計画』まとまる
1981		4/ST数は最大の53STに 3/ひなぎく1号買い換え	<年度末/2館14分室53ST>
1982		3/ひなぎく2号買い換え。年間の個人貸出は最大の28.6万冊に	5/楠葉図書館開設<年度末/3館15分室50ST>
1983	10/市民病院（玄関前）STを開設		8/菅原図書館開設<年度末/4館16分室50ST>
1984		（「1台・30ST」が提案される）	
1985	市民病院内に、貸出開始を知らせるPR放送が行われるようになる。		5/山田図書館開設<年度末/5館14分室45ST>
1986	市民病院3階小児病棟の面会室内に返却ポスト(職員作成)を設置。		5/さだ図書館開設<年度末/6館13分室42ST>
1987			5/御殿山図書館開設<年度末/7館13分室40ST>
1988		2/ひなぎく1号買い換え	5/牧野図書館開設 10/「子どもの本フォーラム」開催
1989		3/ひなぎく2号買い換え。後部出入口にリフトを取付	
1990	返却ポストの老朽化に伴い、新たに購入して設置。		5/津田図書館開設<年度末/9館12分室36ST>
1991		9/市内3カ所の老人ホームにSTを設置	
1992	4/市民病院小児病棟への団体貸出配本を開始		
1993	年度末 / 市内の保育園と3病院に対して団体貸出アンケートを実施	4/市の緑化週間イベントに初参加（以後毎年参加）	11/「第2回子どもの本フォーラム」開催
1994	7/市民病院入院児向け行事と、3病院への団体貸出配本を開始	7/9カ所の保育園に団体貸出巡回を開始。個人貸出は12.8万冊に	3/『枚方市立図書館障害者サービス基本計画』了承
1995	8/市民病院院内STを開設。厚生年金病院入院児への行事を定例化	5/『プロジェクトBM2001』を発表。イベント参加が続く	
1996	11~/院内STに関して、「マスコミの取材や議員等の視察が続く	6/菅原図書館休館中にST設置。香里小学校に巡回	1/菅原図書館の業務を電算化し、新築移転再開館
1997	5/厚生年金病院（院内）STを開設	（緑化週間・ひらかた祭りパレード・長尾高校文化祭の参加定着）	<年度末/9館13分室35ST>

* 本年表にはすべてのサービスポイントの改廃等表現できていない。年度末のサービスポイント数については、主要年度のみ掲載した。

ひなぎく2号の増車にあたって「病院・児童会へも貸出」と、BMによる図書館事業の多様な拡がりの可能性を示唆しているが、実際にはBMは図書館や分室から離れた地域への巡回に大忙しで、それが当時のBMの使命であり、病院サービスなどへの拡大は現実には不可能であった。

続く約12年間(79~90年)は「分館建設の時代」である。特に82年の楠葉図書館開館以来毎年のように分館が建設され、その一方でBMは利用を減少させていった。成人児童を合計した貸出冊数が最高を示した82年度と、9館目の津田図書館が開館した90年度を比較してみると、BMの貸出冊数は成人で約42%、児童では56%も減少させている。(図1参照)

そんな中、83年10月になって市立枚方市民病院(現在453床)の玄関前にST設置が実現した。9年前の『広報ひらかた』で高らかに宣言し、80年の『枚方市立図書館整備計画』にも「病院、施設等への貸出を実施」と書かれたことのひとつがようやく実現したわけである。その後の分館建設を見越した、BMの役割を見直していく上で重要なステップであったといえる。貸出冊数が一桁の巡回日が続く年もあるなど利用の低迷が続いたが、貸出の開始を院内放送してもらうようになったり、3階小児病棟入口横の面会室に職員手製の返却ポストを設置するなど、病院の協力を得な

がら事業の改善に努めている。

(2) 老人ホームへの巡回から『2001』の作成まで(91~95年)

BMにとっての大きな転機は、91年9月から始めた3老人ホームへの隔週巡回である。市の関係課は、従来「巡回するならばすべての高齢者施設に」との考えだったが、このころには「出来るところから取り組んでは」との姿勢に変化していた。それが後押しとなり、各施設入所者への個人貸出がスタートしたのである。入所者数や年齢構成、周辺地域住民の利用の有無などにより利用の差はあるものの、この巡回は成功をおさめた。結果、BMは分館整備が進んだ下では、従来の「地域に設置するST」から、老人ホームや病院・保育所など「施設内で生活する市民などを対象にしたST」の設置へと重心を移していくべきではないかと担当職員が考えるようになった。この「地域サービスから施設サービスへ」という考え方は、後にBM担当職員が独自に検討してまとめた中期計画『プロジェクトBM2001』(以下『2001』と略記)に結実した。

さて、市民病院の返却ポストは90年になって買い換えたが、その頃から小児病棟の入院児が看護婦さんに付き添われて玄関前のBMに本を借りにくるようになり、これを契機に92年4月から小児病棟入口横の面会室に絵本や

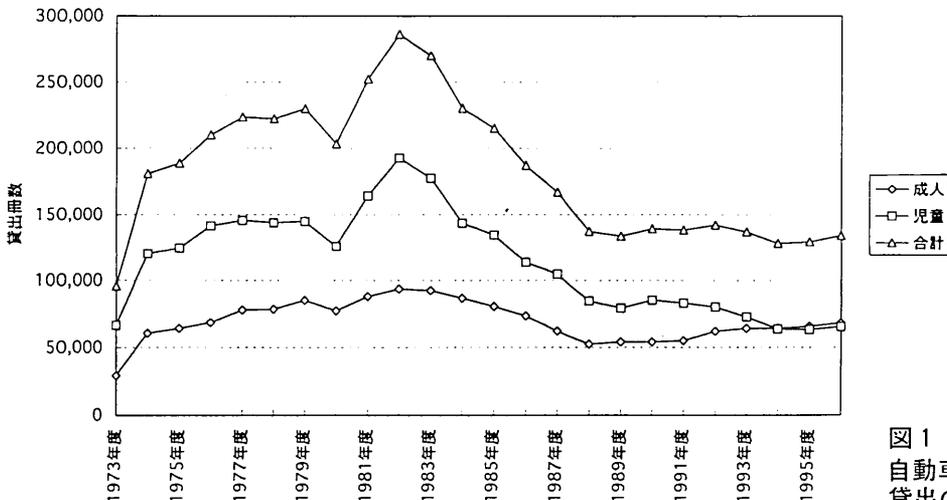


図1 自動車文庫による貸出の変遷

子ども向けの物語・趣味の本など約100冊の団体貸出配本を開始した。93年12月にはアマチュア人形劇団による入院児向けの公演を図書館が主催、94年5月には配本場所を面会室から小児病棟プレイルーム内に変更するとともに、7月から職員2名による子ども向け行事²⁾を開始した。行事の実施にあたっては、BM職員との懇談での婦長の一言が大きく影響している。婦長は団体貸出配本場所の変更を快諾するとともに「図書館員が定期的にプレイルームで子どもを相手に何かされては？」とのアイデアを出してくれたのである。その後の院内貸出開始時にも病院内でのコンセンサスづくりにご協力いただくなど、婦長にはたいへん感謝している。

市民病院における事業の改善とは別に、BMとして老人ホームの次に取り組んだ事業は、保育園への巡回である。学齢前の子どもを預かる施設は市内に100ヶ所以上あるが、そのうち「保育園・保育所」を対象に「団体貸出を希望するか」とのアンケート調査を行った。その際、星ヶ丘厚生年金病院小児病棟を含む3病院にも調査した。その結果、団体貸出を希望した保育園9ヶ所とあわせて、これら3病院への団体貸出配本が94年7月に実現した。保育園の場合はBMが直接乗りつけて子どもの喝采を浴びているが、病院の場合は市民病院小児病棟での経験を踏まえ、図書館が事前に選択した本を配本するという形態をとっている。

このように、老人ホーム・保育園・病院とBMの新展開が多様化する中で、これらを再整理して包括的な概念をあたえ、広く市長部局や市民にもアピールしようという機運が現場の担当者間に盛り上がった。これが95年5月に館内発表した『2001』である。「BMの役割を従来の地域サービス中心から、地域サービス・施設サービス・図書館のPR活動の3本柱とし、今ある車両2台のうち1台を施設サービスのしやすい小型車両にする」として、今後における施設サービスの重要性を説いた。これらは一見目新しいことのように思われるが、過去の様々な報告書や書類を遡って読ん

でみると、まさに図書館発足以来の懸案であったといえる。

(3) 2病院における院内貸出の実施(95～97年)

『2001』を発表してまもなく市民病院総務課との協議がもたれ、95年8月からの「市民病院院内ST」の設置が決まった。これは従来の「市民病院(玄関前)ST」とは別の、隔週金曜日の午後2時間、市民病院1階中央廊下における「店開き方式」による個人貸出である。これに伴って、3階小児病棟面会室に設置していた返却ポストを1階に移設した。院内に持ち込める冊数は約700冊で玄関前に停車しているひなぎく号の4分の1以下になったが、貸出は玄関前の3倍以上となり、いかに院内でのサービスが効果的であるかを実証した。このように院内の貸出が軌道に乗ったため、玄関前のSTは翌96年7月に廃止した。

院内貸出の実現にはふたつの背景、すなわち「玄関前STの問題」と、もうひとつ「病院の変化」が挙げられる。まず玄関前STの問題は、停車位置が駐車場脇で利用者にとって大変危険な場所であるばかりでなく、場合によっては救急車の出入りにも差し支えるおそれがあったことである。よくぞ13年間何事もなく、無事にサービスできたものだとあらためて思う。そして後者の病院の変化とは「入院患者に対するアメニティの改善」が必要とされるようになってきたことであり、図書館によるサービスの充実はまさにその一環として非常に効果的なものと判断されたようである。このことは、総務課長から入院患者向け図書館サービスの論文³⁾をご紹介いただいたことでもわかる。

一方、市内最大の総合病院である星ヶ丘厚生年金病院(644床)では、2ヶ月に1度の小児病棟への団体貸出配本に加えて、小児病棟プレイルームにおける行事の隔月開催を95年8月から開始した。この結果、市民病院小児病棟とあわせて「病院行事は毎月どちらかの病院で必ず開催される」というスケジュール

ルが定着し、今日に至っている。BMでは、これら小児病棟での実績と市民病院での経験をもとに、96年3月以降厚生年金病院庶務課長との懇談を数度にわたって行った。そして1年後の97年3月にBMから具体的な事業プランを提示したところ、病院全体の合意を得ることが出来、5月13日から市民病院と同様の隔週院内貸出を開始した。これとともに、2ヶ月周期の小児病棟への団体貸出配本を、市民病院と同様2週間周期に変更した。

厚生年金病院における院内貸出実施に至る経過を振り返ると、同病院図書室の首藤佳子司書のご助力を抜きに語ることは出来ない。首藤司書によれば同病院での枚方市立図書館による病院サービスの実施に至る前史は「団体貸出受入の検討を始めた76年に遡る」¹⁾とのことで、まさに20年越しの事業である。

4. 現在の病院サービスの概要

ここで現在のサービス概要をまとめたものが次頁の表1である。

(1) 個人貸出

市民病院における個人貸出の概要は次の通りである。また、厚生年金病院においても、曜日と時間が異なる(隔週火曜日・午後1時半～3時)他は全く同様である。

- ・祝日を除く隔週金曜日の午後2時から4時まで、同病院1階中央廊下において実施。ブックトラック2台とブックコンテナ10箱によって約700冊を持ち込み、主に入院患者や付添いの家族向けに貸出を行う。
- ・要員2名が公用車(カラーラバン)でブックコンテナに詰めた本と作業用品等運び、他のSTに巡回するひなぎく2号(リフト付き)が巡回の前後に市民病院前に寄ってブックトラックを運び入れる。
- ・貸出券は即時発行。病院では、市内在住・在学・在職者以外にも発行する。菅原を除く市内他館の貸出券も使えるし、忘れた場合も仮貸出券による貸出が可能。
- ・貸出期間は2週間で、他のSTと同様に期間

の延長も可能。貸出を行っている場所に設置した返却ポスト(ブックポスト)がいつでも利用でき、また他の図書館・分室・STにも返却できる。

- ・貸出に供する本は、小説や雑誌、医学書や旅行ガイドなどの実用書や、子ども向けに絵本・幼年童話・遊びの本などを中心に、比較的新しい本や汚れない本を選択する。大活字本やカセットブックなども用意する。また、他のSTや香里ヶ丘図書館と共用で、貸出に際して本の消毒や殺菌等の処置はとらない。なお、97年度から返却本については香里ヶ丘図書館に帰館後、館内でアルコール消毒を行っている。
- ・サービス開始直前の午後1時50分頃と途中の午後3時頃に、院内放送で利用を呼びかけてもらう。

院内での個人貸出についておそらく最も重要なことのひとつは、返却ポストの設置である。これがあるために、次の巡回日を待たずに退院する患者さんでも、看護婦さんらの手を煩わすことなく自分で返却が出来る。図書館の本を気軽に利用できる第一条件である。

本に関する利用者の要求は、当然のことながら病気や医療に関連するものが高い。この点については、現在のところ「定評のある出版社の医学事典など一般的な本」を用意するにとどまっている。また、大活字本やカセットテープなども人気がある。

利用状況であるが、98年1月10日現在の成人児童合計貸出冊数の全巡回日平均は、市民病院が118.8冊(56巡回)、厚生年金病院が127.6冊(15巡回)である。図2・3にもある通りどちらの病院もいくぶん下降気味で、特に市民病院における97年9月以降の落ち込みは顕著であるが、これは医療費負担割合の増加による影響ではないかとの見方がある。また、やや古いデータであるが、96年11月22日の「市民病院院内」利用者44人のうち「市民病院院内」にて利用登録をしている人が32人、他の図書館の貸出券を利用した人が8人、仮貸出券を利用した人が4人であった。また、

事業の種類	実施病院	実施周期	事業内容概略
個人貸出	2ヶ所	隔週 (年間各22回前後)	約700冊持ち込み、平均120冊貸出。返却本は消毒
団体貸出	5ヶ所	隔週2ヶ所 隔週3ヶ所	アルコール消毒した本を30~120冊配本
入院児向け行事	2ヶ所	隔月 (年間各6~7回)	子どもの参加は毎回10人前後。親や看護婦さんも参加

表1 現在の病院サービス概要

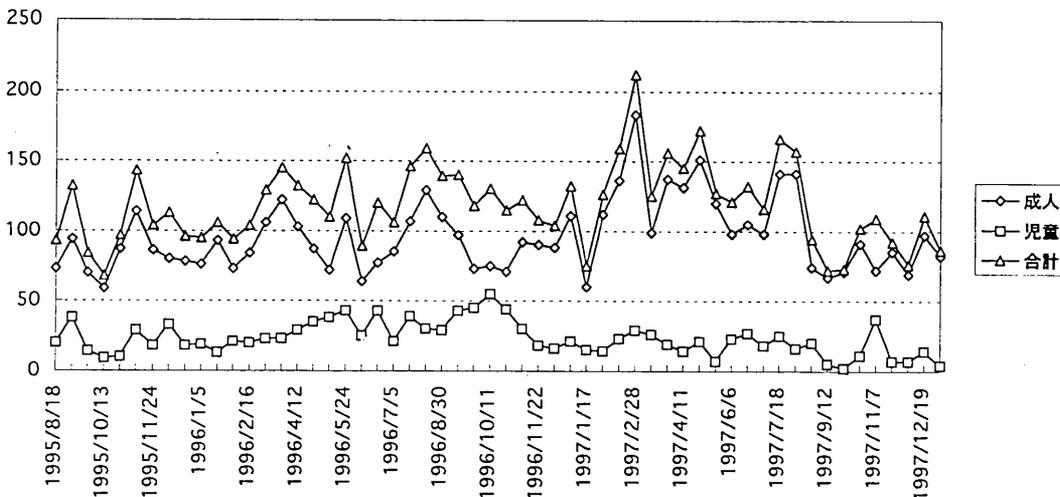


図2 市民病院内ステーションにおける貸出の変遷

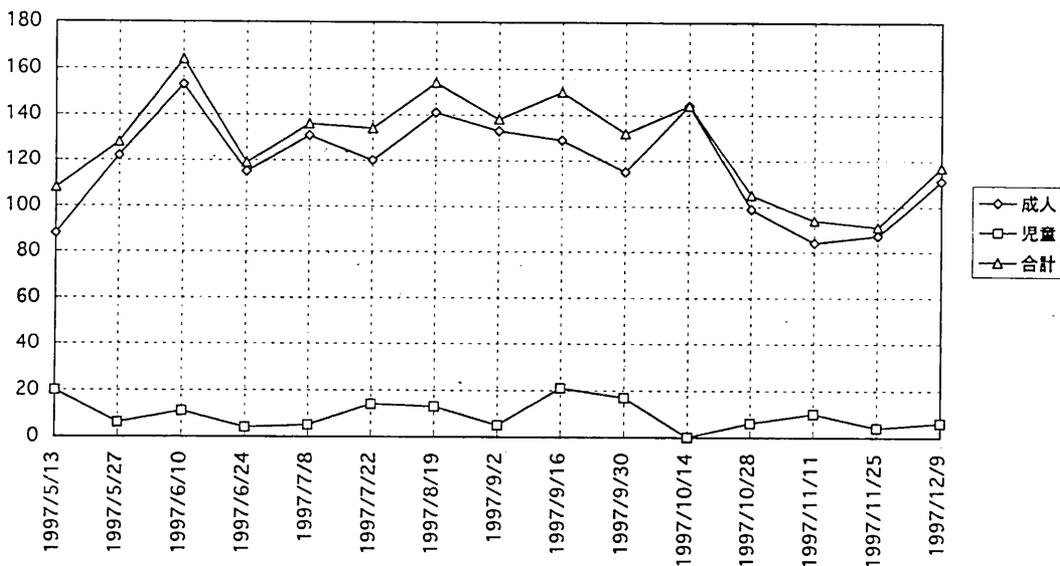


図3 星ヶ丘厚生年金病院ステーションにおける貸出の変遷

子どもの本を利用した人は6人で、圧倒的に成人向け図書の利用が多かった。

(2) 団体貸出と子ども向け行事

市民病院と厚生年金病院の小児病棟、及び病児保育を実施している小児科医院など合計5カ所に対して、BM職員が選択した児童書を配本している。2病院の小児病棟については、個人貸出の際に配本しているため隔週周期であるが、他の3ヶ所については隔月配本で、年間6回程度である。30冊から120冊程度まで、病院側の希望にあわせて配本している。ノートを備え付けて子どもの希望を聞いたりしているが、十分とはいえない。小児病棟への配本は、最近では絵本を交換する週と、その他の本を交換する週とを交互に繰り返すなど配本パターンを工夫している。また、小児病棟では管理が行き届かず紛失も多いが、この点には目をつぶって「取りあえず本に親しんでもらう」ことを第一に心がけている。なお、病院側からの希望もあって本の表面のみアルコール消毒をしている。

子ども向け行事については、2病院の小児病棟プレイルームにて隔月で開催し、それぞれ年間6回程度実施している。大型紙芝居やパネルシアターなどの上演と、簡単な手作り遊びが主なプログラムである。病児は皆おとなしく、たまにやってくる図書館員には喜怒哀楽をほとんど表に出さないのが手応えを感じにくい。変化の少ない入院生活には非常に有効であるらしく、子どもたちだけでなく看護婦さんや付き添いの家族から大いに感謝されている。

5. 本の消毒

本による感染は「あるともいえないし、ないともいえない」⁵⁾という状況であるらしい。ただ、一般利用者の素朴な不安を解消することも現段階では必要であるとの考えから、本市のBMでは一定の措置を講じるようになった。本を消毒するタイミングとしては、外から病院内に持ち込む前の段階と、病院内で利用さ

れた本を持ち帰った際に行う段階がと考えられるが、2病院の個人貸出については、病院内で利用された本のみを対象に消毒している。また5つの病院の団体貸出については、持ち込む前の本と持ち帰った本の両方を行っている。消毒の方法は、脱脂綿にアルコールを染み込ませて1冊1冊本の外側を拭き取るという簡単なもので、BM職員総出の人海戦術である。もっともあくまで試行中であって、どのような方法でどの程度まで実行すべきかは模索中である。出来れば「消毒のガイドライン」のようなものを、この誌上でも検討いただければありがたいところである。

6. 今後の課題と展望

院内における個人貸出も小児病棟における団体貸出や行事も、開始してまだ数年しか経過しておらず、まだまだ試行錯誤の状態である。また、全国の自治体では行政改革や財政難等を理由にBMの活動そのものを廃止ないしは縮小するケースが増えており、本市においても今後継続されるかどうか不透明な部分が多い。先行きのわからない状況が続くが、現下での課題と展望について少しふれてみる。

(1) 専用車両と担当部門の問題

利用者もそして職員も、今とにも最も強く感じていることは「本が少ない」ということであろう。これは個人貸出・団体貸出に共通する悩みである。人手と図書費次第で大きく充実するのだろうが、取りあえずはカラーバンではなく、ブックトラックがそっくり積載できるような背の高いワゴン車を使うことである。これが購入できれば搬入可能な冊数は飛躍的に増加し、病院に限らず老人ホームや障害者施設などでの使い方次第で、我々の言う「施設サービス」のあり方が大きく変わる可能性がある。

病院サービス、中でも院内における個人貸出の今後の事業拡大のあり方については、従来の「店開き方式」から「病室巡回方式」への切り替えという道があり、一方で貸出を実

施する病院を増やすという道もある。粗っぽく言えば「質的拡大か量的拡大か」といった選択である。「量的拡大」については、事業の担い手としてBM以外の、例えば分館の事業としても考えられないかという視点もある。しかしながら「分館のサービス圏域内の読書需要には分館が対応する」ことはひとつの理想であるが、分館の担当者は来館者へのサービスに追われているのが実状であろう。専用車両を持ちネットワークの良いBM部門に集中して担当することが当面は効率的かつ効果的と思われる。

(2) 病院図書室司書や医師、ボランティアとの協同作業

利用者の要求に可能な限り応えていくことは図書館員の責務であるが、こと病院内での医療情報ということになると「すべて求めに応じて」というわけにもいかないだろう。インフォームドコンセントなど医療の世界における成果の上に、病院図書室の司書や医師とも相談しながら慎重に進めなければならない。

大きな病院には地元の小中学校によって「院内学級」が設置されているが、そこで求められる本はどのようにして用意されているのだろうか。学校や学校図書館との連携は実践も議論もさかんに行われているが、それらは今のところ「院内学級」にまで手が回らないのが実状であろう。学校にも病院にも事業展開している本市のBMには、こうした視点からの実践や提言が率先して行われるべきである。

ボランティアについては、貸出そのもののお手伝いや子ども向け行事への協力要請など、すでに実施している自治体や病院もあるだろう。また、感染対策と併せて考えれば、本の消毒作業にご協力いただくという道もあるのではないか。この点は特に、図書館員だけではまかないきれない部分であり、また図書館員でなくても取り組める作業である。

前述の通り、本市における病院サービスの歩みを振り返ってみると、病院職員の力を借りることが少なくなかった。他施設との連携ということが何かと図書館で話題になるが、病院サービスは本当に連携なくしては出来な

い。今後のサービス展開を考える上でも、図書館員だけでは果たし得ない部分が多々あるように思われる。

7. おわりに

先に返却ポストについてふれた際「院内での個人貸出についておそらく最も重要なことのひとつ」と書いた。「そこで借りた本」を気軽に返却できるポストは、その設置にかかるコストを遙かに上回る効果を発揮してくれること請け合いです。更にもうひとつ、意外な事実を知る手だてとなった。ポストに返却できるのは「そこで借りた本」だけではなかったのだ。すなわち、入院患者の家族によって市内の他館から借りられた本が、実にたくさん返却ポストに投じられているのである。我々が院内貸出を実施するしないに関わらず、入院患者は院内貸出をいわば先取りする形で図書館を利用していたのだ。

このことは、いかにも市民の「図書館よ、早く病院の中に入ってきて」という無言の叫びのように思われる。病院サービスが多くの自治体と病院で当然の事業として定着していくことを願ってやまない。

【参考文献】

- 1) 岡室公平：公共図書館における障害者サービスの確立をめざして、図書館界44(4), 156-165, 1992
- 2) 紫藤孝史：入院している子どもたちへのおはなし会、こどもの図書館 42(4), 18-19, 1995
- 3) 山室真知子：病院における患者図書サービス、病院, 54(4), 498-499, 1995
- 4) 1997年12月18日に堺市立金岡市民センターで開催された大阪公共図書館協会主催の職員研修会報告による。なお、この研修会報告は、『図書館界』49巻6号(98年3月刊)に掲載される予定。星ヶ丘厚生年金病院と枚方市立図書館の関わりについてはこの報告に詳しい。
- 5) 同じく、首藤司書の報告による。